

土肥慶蔵 傳

中川 浩一

大阪府済生会富田林病院皮膚科部長

はじめに

土肥慶蔵(1866～1931年)は江戸末期に越前武生に生まれた本邦皮膚科学の開祖である。明治時代に欧州に留学して日本に近代皮膚科学をもたらした。東京帝国大学医科大学皮膚病黴毒(梅毒)学講座の教授として、現在の日本皮膚学会の創設、日本皮膚科学会雑誌の創刊に尽力した。生涯を通して本邦皮膚科学の発展に大きく寄与したわれわれ皮膚科医の大先輩・偉人である。本稿ではその生涯について解説したい。

I. 東京帝国大学卒業から学会設立まで

土肥先生は慶応2(1866)年に石渡家の次男として生まれた(23歳時に叔父土肥淳朴の養嗣となって以後、土肥姓を名乗った)。父は五代宗伯で代々越前府中本田家に仕えた典医の家柄だった。しかし、時代の趨勢は決して先生にとって順風ではなく、父の健康状態もすぐれず多難な少年時代だった。それでも初等教育を受けた進脩小学校では、成績優秀による飛び級で8年かかるところを6年で卒業した。

明治13(1880)年春、先生は14歳で上京して東京大学予備門から東京帝国大学医科大学に進学し、同23(1890)年に卒業した。すぐさま外科学講座に入局し、ドイツ人教師Scribaに師事した。このころから先生の才能は開花し須門十哲(須門はスクリバー門の略)と呼ばれた。しばらくは外科学の研鑽を積んだが、“このままここで修行しても、実地の腕がいくらか上達するだけで学問はたいして進みそうもない”と考え、当時の学問の中心であったドイツへ私費留学した[明治26(1893)年]。先生は単に医師であるだけではなく、医科学の道を極めることを強く望んでいた。ハイデルベルグ大学で外科学を学んでいたが、このとき、先生に転機が訪れた。東京帝国大学で皮膚病黴毒学講座の独立が立案され、先生にその白羽の矢が立ったわ

けである。病院長の宇野朗教授(外科学担当、皮膚科学も兼任)に内交渉を受けた。最初、先生は辞退したが最終的には一大決心をした。ドイツからオーストリアに転進した先生は当時の皮膚科学界では世界的権威であったKaposi教授に皮膚科学を学んだ。さらにフランスに渡り、Guiyon教授のもとで泌尿器科学を研鑽して、明治31(1898)年春に帰朝した。

帰朝後は助教授を経て同年6月に教授に昇任して帝国大学皮膚病黴毒学講座を主宰した。まさに日本の皮膚・泌尿器科学の夜明けであった。当時は皮膚科学、梅毒学と泌尿器科学は混然一体としており、先生も淋病患者の治療や、膀胱鏡を用いた膀胱癌の診療を行っていた。しかし、日本におけるこれらの分野は黎明期にあり、先生は本邦における斯学の発展を目指して、まずは同士の結束をはかろうと試みた。明治33(1900)年には日本皮膚病学会(現日本皮膚科学会)を創設した。名称は皮膚病学会だが、会員は皮膚科医、梅毒医、泌尿器科医で構成されていた。学会発足の翌年には『皮膚病学及泌尿器病学雑誌』(現日本皮膚科学会雑誌)を刊行した。その1巻1号の冒頭に先生は次のような序文を残している¹⁾。

「今や遠西文明諸邦の医学界は春景正に濃にして百紫千紅眼を照らして新なり。我皮膚病学及泌尿器病学雑誌は、勉めてその状況を細述してこれを我同學の諸君子に示すと共に、我國杏林野春色を寫して、以て遠西の學者をして、絶東の桃源、春華將に妖紅艶紫の妍を競はむとするものであることを知らしめむとす。若夫れ楮小にして大を懷き、綆短くして深を汲むの譏は、吾輩寧ろ甘じて之を受けむ。而かも燕雀の小志を棄てて、鴻鵠の高學を慕ふ、精神一たび到らば何ぞ事の成らざるを憂へむ。我皮膚病学及泌尿器病学雑誌の自ら期する所、實に此に在り。」

西欧の皮膚科学を日本に取り入れ、また日本の皮膚科学を西欧に知らしめることこそが日本の皮膚科学発展の道筋であることを説いたわけである。その後、



図1 日本皮膚病徴毒圖譜

この学会と雑誌が本邦の皮膚科学発展の両輪となったことは、論を俟たない。

Ⅱ. 皮膚科学における先生の学績

土肥先生は後進の指導のために、ムラージュの作成、アトラス、教科書の出版にも努力を惜しまなかった。ムラージュは皮膚病変の蝨性標本で19世紀の欧州では盛んに作成されていた。患者の病変に石膏を塗って型をとり、そこに蝨を流し込んで標本を作って彩色したものである。先生は先の留学時にその技法を学び、帰朝後に同郷の画工であった伊藤有^{いとうたもつ}に数多くのムラージュを制作させた²⁾。アトラス(皮膚病の肉筆図画)も伊藤によってみごとに描写され『日本皮膚病徴毒圖譜』として第1帙^{ちっ}が明治36(1903)年に出版された[完成は明治38(1905)年]。1帙5篇で(帙は書物などが入った箱を示し、中に5篇の皮膚病図譜が収められている)、10帙50篇の皮膚疾患の肉筆画で構成されている(図1)³⁾。伊藤有と先生とは切り離せない名コンビであった。カラー写真のない時代であったので、このような図譜は皮膚科を志す医師にどれほど役にたったか量り知れない。では、現在汎用されるカラー写真がすべてにおいて肉筆画の図譜より優れているかということそうでもないことに気づく。本図譜では、強調すべきところは強調され、みるものにその病変のポイントを伝えている。たとえば図2は『文身者ノ丘疹性徴毒』というタイトルである(文身とは刺青のこ

と)。背部に多数の丘疹が見られるが、よくみると中央の役者絵の部分には丘疹がない。というのは役者絵の部分の刺青の赤色色素には水銀が配合されており、そのため梅毒トリポネーマがこの部分を嫌ったということを示している。



図2 文身者ノ丘疹性徴毒

中央の役者絵部分には丘疹がない。

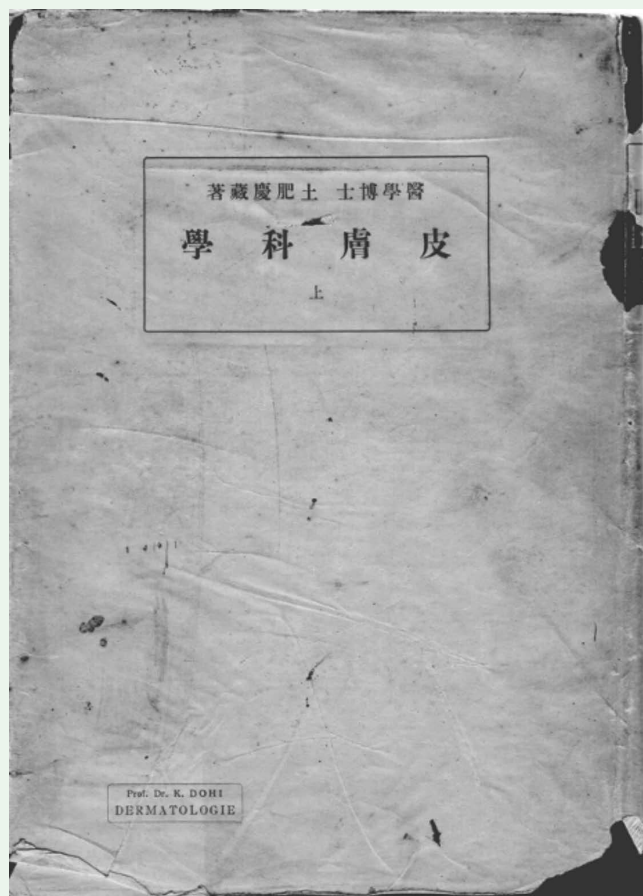


図3 皮膚科學上巻 土肥慶蔵著 明治43(1910)年初版

教科書として『皮膚科學』が明治43(1910)年に朝倉書店から発刊された(図3)。総論として、解剖、生理、病理、治療などが解説されているのは現在の皮膚科の教科書と同様だが、これらに先んじて、『皮膚病史』の項があり、古代からの皮膚科学の歴史が記載されていることは特筆に値する。総論(療養通論)の中には各種軟膏の製法が書かれている。先に述べた水銀は水銀軟膏の名前で、水銀三十分、無水刺納林(ラノリンのことか?)十五分、黄蠟十五分、単鉛硬膏九十分から製剤され、「殊に黴毒性皮膚疹ニ使用シテ奏功最モ確實ナリ」と書かれている。このように、当時は水銀のほか、ヒ素も“^{あじあがん}垂細垂丸”として使用されていたが、現代では毒物として使用が禁じられている。しかし、人間が死なないで感染微生物が死ぬ量で薬剤が調合されていたことは当時の人々の知恵とも考えられる。現在が当時より安全かという点、必ずしもそうではないように思う。

Ⅲ. 土肥慶蔵と梅毒

土肥先生はことさら梅毒の歴史に興味があり、また公衆衛生上の梅毒予防にも奔走した。古来、梅毒の

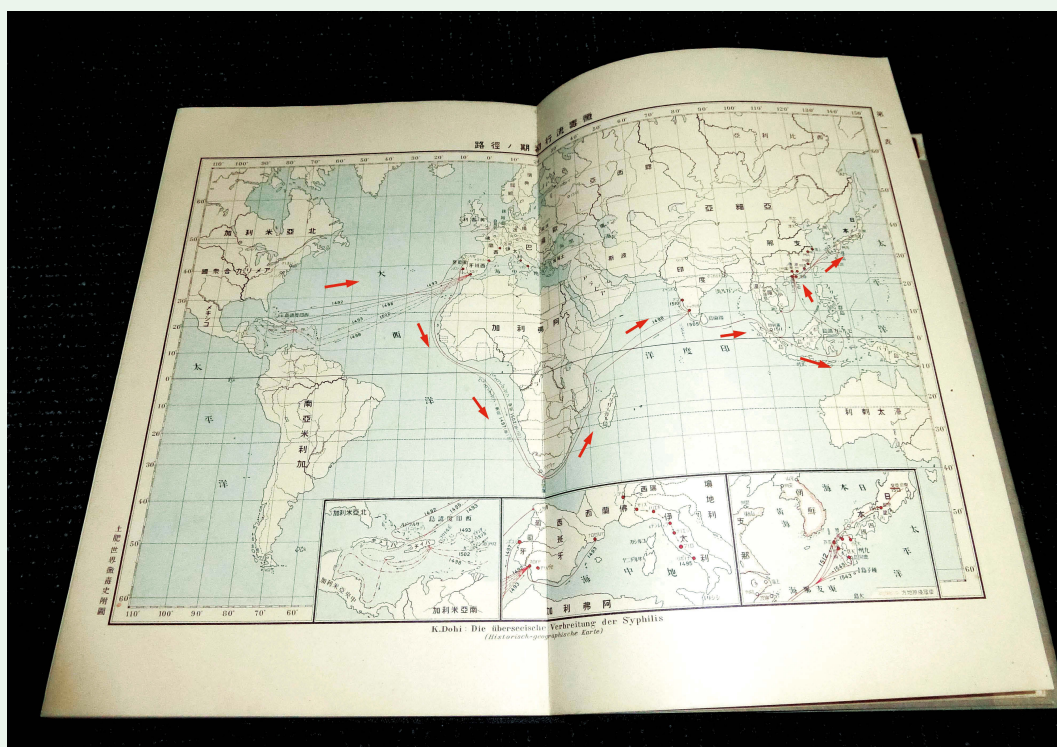


図4 世界黴毒史

コロンブスの航海後、アメリカ大陸から日本に梅毒が伝播した経路(赤矢印 ※著者記入)が示されている[大正10(1921)年発刊]。



図5 福井県白道寺にあった土肥慶蔵先生のお墓(現存しない)

歴史は古代説(古代から全世界に梅毒はあったとする説)とコロンブスがアメリカ大陸発見の航海からの帰国に伴ってヨーロッパに輸入されて、それがインドを經由して日本にも広まったという新大陸説の2つがあった。先生は後者を支持し、古今東西の古文書を検証して大正10(1921)年に『世界梅毒史』を発刊した(図4)。この著作はたいへんな作業で、古文書の中に梅毒の流行を示すような記録を1つずつ探し出し、その年代から梅毒の伝播を証明したわけである。先生は日本語のみならずドイツ語、イタリア語、中国語などにも精通していたことがうかがえる。この書は皆見省吾(九州大学名誉教授)によってドイツ語訳され、世界中で読まれた。梅毒予防については、講演会、講習会、ラジオを通じて啓発活動を行い、明治40(1907)年には日本花柳病予防会を設立した。本会は、現在も「性の健康医学財団」と名を改めて活動を行っている。

おわりに

このような碩学の土肥慶蔵も病には勝てず、昭和6(1931)年11月6日、直腸癌の肝転移によってこの世を去った(享年 満65歳)。その霊は東京の多磨霊園に眠るが、福井県丸岡町白道時(現坂井市)にも分骨されてお墓があった(図5)。ただ、このお墓は永年の風雨にさらされて崩壊して現存しない。非常に残念である。

以上、土肥慶蔵先生について解説し、若干の私見も述べた。

〈文 献〉

- 1) 大塚藤男：日皮会誌 (JDA LETTER) 9：7, 2011
- 2) 石原あえか：西日皮膚 77：542, 2015
- 3) 長門谷洋治：皮膚病診療 8：1088, 1986